

エリクソンのパーソナリティ構成要素の 測定尺度 (EPCS) の構成

—— 人生周期における基本的信頼感から親密性 ——

児童学科 藤村和久

抄録：本研究は、Erikson の人生周期のうち基本的信頼感から親密性の 6 つの心理社会的危機を通じて内在化された自我感に特徴づけられる人格構成要素の測定尺度を構成することを目的とする。

藤村 (2004) は、まずグループ主軸法を適用して、全項目の 6 つのグループ主軸に対する負荷量から尺度項目を選択した。本研究では、同義語的な項目を除き、6 尺度の全項目を因子分析して尺度項目の因子的妥当性を評価し、最終的に各尺度 7 項目が決定された。これらの尺度を EPCS (Erikson's Personality Component Scales) と呼ぶ。EPCS 各尺度の係数は 0.814~0.857 であった。

EPCS の内的な階層的構造を示したパス図が適切であることが SEM (structural equation modeling) により確認された。さらに、EPCS と性格特性および生活意識との因子構造的関連性から EPCS の人格的機能が論じられた。パーソナリティ構成要素はそれぞれ固有の人格的機能を持ちながら、人格として統合されることが明らかになった。

キーワード：エリクソン、自我感、自我同一性、心理尺度構成、構造方程式モデル

はじめに

Erikson (1959) は、ライフサイクルにおける 8 つの心理社会的危機を通じて獲得される内実についての自我感をパーソナリティの構成要素と呼んだ。これらの構成要素は互いに高い相関性を有しているため、尺度構成に際して、用意された全項目間の相関行列に直接的に因子分析法を適用することが困難である。なぜなら、もともとそれぞれの概念間の相関性が高いため、全項目間の相関行列に因子分析法を適用すると、最初の数因子に項目が集中して、より高次の因子が抽出されてしまう (藤村, 2004)。藤村 (2004) は、Erikson の 8 つの構成要素のうち、基本的信頼感から親密性の 6 つのパーソナリティ構成要素の尺度構成を行うにあたって、その前段階の処理として、上記のような相関性が高い概念の心理尺度構成におけ

る主因子法 (principal factor analysis) の適用についての問題点を克服する方法として、グループ主軸法 (group principal axis method, 芝, 1975) の適用可能性について検討した。

本論文は、藤村 (2004) を踏まえて基本的信頼感から親密性の測定尺度を最終的に決定することを目的とした研究 1 と、これらの尺度によって測定されるパーソナリティ構成要素が他の人格的諸特性といかなる関連性を有するのかを検討する研究 2 から構成される。

研究 1：EPCS (Erikson's Personality Component Scales) の構成

【問 題】

藤村 (2004) は、あくまで相関性の高い構成概

念の尺度化において、グループ主軸法の適用可能性を検討することが目的であったため、項目選択は6つのグループ主軸に対する項目の構造値の高い項目を機械的に選択したものであった。ところが、グループ主軸の構造値によって選択された項目を検討すると、尺度によっては、同義語反復的な項目が含まれる尺度があった。たとえば、基本的信頼感尺度には、「私の未来は明るく開けているように思う」「私の人生はうまくいくように思う」「自分の人生に希望がもてない」、あるいは「人生をうまく乗り越えていける自信がある」「人生の困難も自分なりに克服していけると感じている」、生産性尺度では、「努力して物事を達成する喜びが好きである」「努力して物事を成し遂げたときの感動を経験したことがあまりない」、また同一性尺度では、「一体、どれが本当の自分なのか分からないことがたびたびある」「どれが本当の自分であるか、分からないことがある」という具合である。

同義語反復的な項目が含まれる尺度は、内的整合性信頼性が不当に高められてしまい、尺度項目の等質性の高さと尺度の妥当性との関係(芝, 1972)から、尺度の妥当性を低められるという2重の問題点がある。このことから、特に基本的信頼感尺度においては、測定内容も片寄りその影響が大きいいわざるを得ない。

そこで、本研究では上記の問題を克服するため、藤村(2004)のデータを再分析して尺度の再構成を行う。項目の入れ替えは、藤村(2004)におけるグループ主軸に対する構造値と項目の内容に基づいて行う。特に基本的信頼感尺度については、基本的信頼感を①自己への信頼感、②社会から受け入れられているという社会的環境への信頼感、③自己の人生への信頼感を表す構成概念と考え、どれかに片寄らないように留意する。他の尺度については、同義語反復的な項目を可能な限り少なくする。さらに、Eriksonの残りの2つの心理社会的危機によるパーソナリティ要素の尺度を将来

的に追加することを視野に入れて、被験者の負担をより軽減するために、各尺度1項目を減らしても十分な信頼性を維持しながら各尺度7項目で構成する。ここで構成される尺度をEPCS(Erikson's Personality Component Scale)と呼ぶことにする。

【方 法】

1. 調 査

藤村(2004)の調査は、次のように実施された。Erikson(1959, 1963)のライフ・サイクルにおける心理社会的危機についての記述に基づいて、基本的信頼感から親密性の心理社会的危機を通じて内在化されるパーソナリティ特徴を表すと考えられる項目を、概念ごとに20~26項目用意し、関西の大学生478名(男子260名、女子218名)に授業中に実施した。調査は2002年10月~11月に行った。調査は無記名で、各項目の内容が「いつもの自分にどの程度あてはまるか」について、「全くあてはまらない」から「非常にあてはまる」の5段階で答えるよう教示して得られた回答に、1~5点を配点して分析を行った。

本研究は、このデータを用いて基本的信頼感から親密性の6尺度を再構成するものである。再構成の手続きは以下の通りである。

2. 尺度項目の因子分析

藤村(2004)で選択された尺度項目のうち、削除する項目、入れ替えるべき項目を6つのグループ主軸に対する項目の構造値にもとづいて決定した。グループ主軸に対する構造値による項目選択は、理論的、手続き的に因子的妥当性を反映するものということができるが、選択された項目間の因子構造そのものとはいえない。なぜなら、項目間の因子構造的関係は選択された項目間の相関関係から導き出される因子空間によって定められるからである。したがって、最終的に選択された各

尺度7項目、計42項目間の相関行列に因子分析を適用することによる項目の因子的妥当性の確認は欠かすことができない手続きと考える。

3. 尺度の信頼性

各尺度の信頼性係数として α 係数を算出する。

4. 尺度の基本統計量

6尺度得点の平均値、標準偏差および尺度間相関係数を算出する。

5. 尺度間の因子構造的関係の確認

6尺度間の因子構造的関係を共分散構造分析により確認した。

【結 果】

1. 尺度項目の探索的因子分析

最終的に選択された、各尺度6項目、計42項目間の相関行列を因子分析した結果は表1である。因子分析は、主因子法の繰返しによる共通性の推定を行い、共通性が収束基準に達した主因子解をEquamax法で直交回転を行い、さらにPromax法で斜交因子解を求めた。表1はその因子パターン行列である。

第1因子は、「私の人生はこれからもうまくいくように思う」「私は自分のまわりの人から必要とされていると思う」「自分は世の中で有用な人間だと思っている」「私は、周囲の人から信用されている」などの7項目から成り、自己や自己が存在する世界への信頼感を表す基本的信頼感の因子である。

第2因子は、「いったん決断したことでも後でいろいろと考えてしまう」「人から言われるより、自分で決めることが多い」「人からとやかく言われても、自分の判断に迷うことはあまりない」などの項目から成り、外界への適応過程で自律的なされた自らの判断や行動に対するゆるぎなさを

表す自律性の因子である。

第3因子は、「人前で、自分の意見をはっきり言うことができないほうである」「会やグループの中では、いつも何か提案するのは私である」「何事にも積極的に行動するほうである」などの項目から成り、社会的な場面や物事への自主的、積極的な行動を示す自主性の因子である。

第4因子は、「自分を高めるより、一時的な楽しさを選ぶほうである」「努力して物事を達成する喜びが好きである」「勉強や仕事に努力するより、その時々が楽しければよい」「物事に迷ったとき、いつも安易な方を選んできたように思う」「困難なことにも、正面から取り組んでいくほうである」などの項目から成り、勉強、仕事、課題などに取り組む持続的な忍耐と達成したときの喜びの経験に関する項目が高く負荷する生産性の因子である。

第5因子は、「もっと別の自分であつたらよいのにと思うことがたびたびある」「どれが本当の自分であるか、分らないことがある」「どんな時でも、自分を見失わないでいられる」「いまでも自分に自信が持てないでいる」「自分の行動に一貫性がないと感ずることが多い」「自分を素直に受け入れられないでいる」などの項目から成り、自己の斉一性、一貫性と自己肯定的な感覚を表す同一性の因子である。

第6因子は、「人と親密な付き合いをしたいとは思わない」「人と関わり過ぎると不安になり、一定の距離を置いてしまう」「人を心から愛することができる」「自分の気持ちを打ち明けて、人と親しく付き合うことができる」「人を心から信用することができない」などの項目から成り、信頼感や同一性の確立など、自己の確立に根ざした他者との親密な関係の形成、維持を表す親密性の因子である。

EPCSの全項目間の構造は、表1から因子的妥当性を有することが明らかになった。各尺度内の項目間相関係数を検討したところ、基本的信頼感

表1 EPCS 尺度項目の探索的因子分析 (Promax 解の因子パターン)

項	目	基本的信頼感	自律性	自主性	生産性	同一性	親密性
1	私の人生はこれからも順調にいくと感じている	0.62	-0.02	-0.09	-0.09	0.21	-0.04
2	周囲の人は私を十分認めてくれていると思う	0.47	0.04	0.05	-0.05	0.02	0.13
3	私は自分のまわりの人から必要とされていると感じている	0.71	0.05	0.02	-0.02	-0.09	0.11
4	私の代わりは他にもいると感じている	-0.38	-0.08	0.03	-0.02	-0.12	-0.06
5	私の人生はうまくいくように思う	0.67	0.04	-0.14	-0.05	0.29	-0.08
6	自分は世の中で有用な人間だと思っている	0.70	-0.01	0.11	-0.03	0.08	-0.21
7	私は、周囲の人から信用されている	0.58	-0.06	-0.02	0.11	-0.04	0.22
8	いったん決断したことで、後でいろいろと考えてしまう	0.00	-0.77	0.11	0.08	0.06	-0.11
9	自分のしたこと、それでよかったのか考えることが多い	-0.04	-0.58	0.12	0.02	-0.02	-0.13
10	人からとやかく言われると、気にする方である	0.16	-0.55	-0.05	0.14	-0.25	0.04
11	人から言われるより、自分で決めることが多い	0.05	0.46	0.15	0.14	-0.05	-0.13
12	人からとやかく言われても、自分の判断に迷うことはあまりない	0.04	0.67	0.13	-0.10	-0.02	-0.17
13	自分が決断したことは、後で悔やむことはあまりない	0.09	0.70	-0.13	-0.05	0.03	0.09
14	一度決めたことは迷わずに実行することができる	0.05	0.63	0.06	0.14	-0.11	-0.03
15	人前で、自分の意見をはっきりとすることができない方である	0.02	-0.04	-0.76	0.07	-0.08	0.03
16	会やグループの中では、いつも何か提案するのは私である	0.07	-0.10	0.75	-0.04	-0.06	-0.08
17	良いと思ったことでも皆の前ではあまり発言しない方である	0.02	0.05	-0.75	0.02	-0.05	-0.04
18	人から求められるまで、自分の意見は言わないことが多い	0.11	0.11	-0.80	0.04	-0.04	-0.12
19	何事にも積極的に行動する方である	0.13	0.10	0.48	0.12	-0.06	0.15
20	新しいことに取り組むとき、引っ込み思案になることが多い	0.07	-0.21	-0.40	-0.02	-0.19	-0.11
21	人から指示されて、初めて動くことが多い	0.02	-0.27	-0.41	-0.17	0.06	-0.03
22	勉強や仕事にまじめに取り組んだ経験があまりない	-0.07	0.11	0.06	-0.65	0.05	-0.08
23	自分を高めるための努力より、一時的な楽しさを選ぶ方である	0.18	-0.06	0.02	-0.80	-0.04	0.07
24	努力して物事を達成する喜びが好きである	0.08	-0.17	-0.06	0.63	0.01	0.09
25	勉強や仕事に努力するより、その時々が楽しければよいと思う	0.19	0.06	0.02	-0.79	0.02	0.05
26	物事に迷ったとき、いつも安易な方を選んできたように思う	-0.03	-0.17	-0.02	-0.51	-0.03	0.09
27	困難なことにも、真正面から取り組んでいく方である	0.14	0.16	0.09	0.52	-0.04	-0.10
28	物事を成し遂げた喜びをあまり知らない	-0.10	0.17	-0.08	-0.50	-0.23	-0.13
29	「もっと別の自分であつたらよいのに」と思うことがたびたびある	-0.06	-0.02	-0.08	-0.09	-0.65	0.06
30	どれが本当の自分であるか、分からないことがある	0.01	-0.07	0.05	-0.04	-0.52	-0.14
31	どんな時でも、自分を見失わないでいられる	0.01	0.26	-0.08	0.07	0.34	0.02
32	いまも自分に自信が持てないでいる	-0.30	0.01	-0.09	0.05	-0.64	0.11
33	自分の行動に一貫性がないと感じることが多い	0.03	-0.21	0.14	-0.28	-0.38	-0.08
34	これからは、今までとはもっと違った自分でありたい	-0.11	0.16	-0.09	0.04	-0.76	0.07
35	自分を素直に受け入れられないでいる	-0.06	0.01	0.02	0.07	-0.63	-0.19
36	人と親密な付き合いをしたいとは思わない	-0.03	0.15	-0.07	-0.11	0.12	-0.58
37	人と関わり過ぎると不安になり、一定の距離を置いてしまう	0.17	-0.02	-0.08	0.13	-0.13	-0.73
38	人を心から信用することができない	-0.07	-0.02	-0.03	0.01	-0.01	-0.67
39	人と親密になると、自分を見失うようで不安である	0.21	-0.04	0.10	-0.03	-0.26	-0.56
40	自分の気持ちを何でも打ち明けて、人と親しく付き合える	0.22	0.01	0.17	-0.06	-0.12	0.48
41	人を心から愛することができる	0.28	0.03	-0.09	0.02	-0.17	0.56
42	自分が傷つきそうで、人を愛することができない	0.03	-0.08	0.01	0.03	-0.10	-0.59
因子間相関	基本的信頼感	1.00	0.43	0.40	0.35	0.52	0.53
	自 律 性	0.43	1.00	0.46	0.40	0.58	0.24
	自 主 性	0.40	0.46	1.00	0.39	0.37	0.34
	生 産 性	0.35	0.40	0.39	1.00	0.23	0.37
	同 一 性	0.52	0.58	0.37	0.23	1.00	0.37
	親 密 性	0.53	0.24	0.34	0.37	0.37	1.00

尺度項目の「私の人生はこれからも順調にいくと感じている」と「私の人生はうまくいくように思う」が0.658,「私は自分のまわりの人から必要とされていると感じている」と「私は、周囲の人から信用されている」が0.581であった。また、生産性尺度項目の「自分を高める努力より、一時

的な楽しさを選ぶ方である」と「勉強や仕事に努力するより、その時々が楽しければよいと思う」の相関係数が0.688であった。これらは、いずれも内容的にも数値的にも同義語反復的と断ずる程度とはいえないと考える。

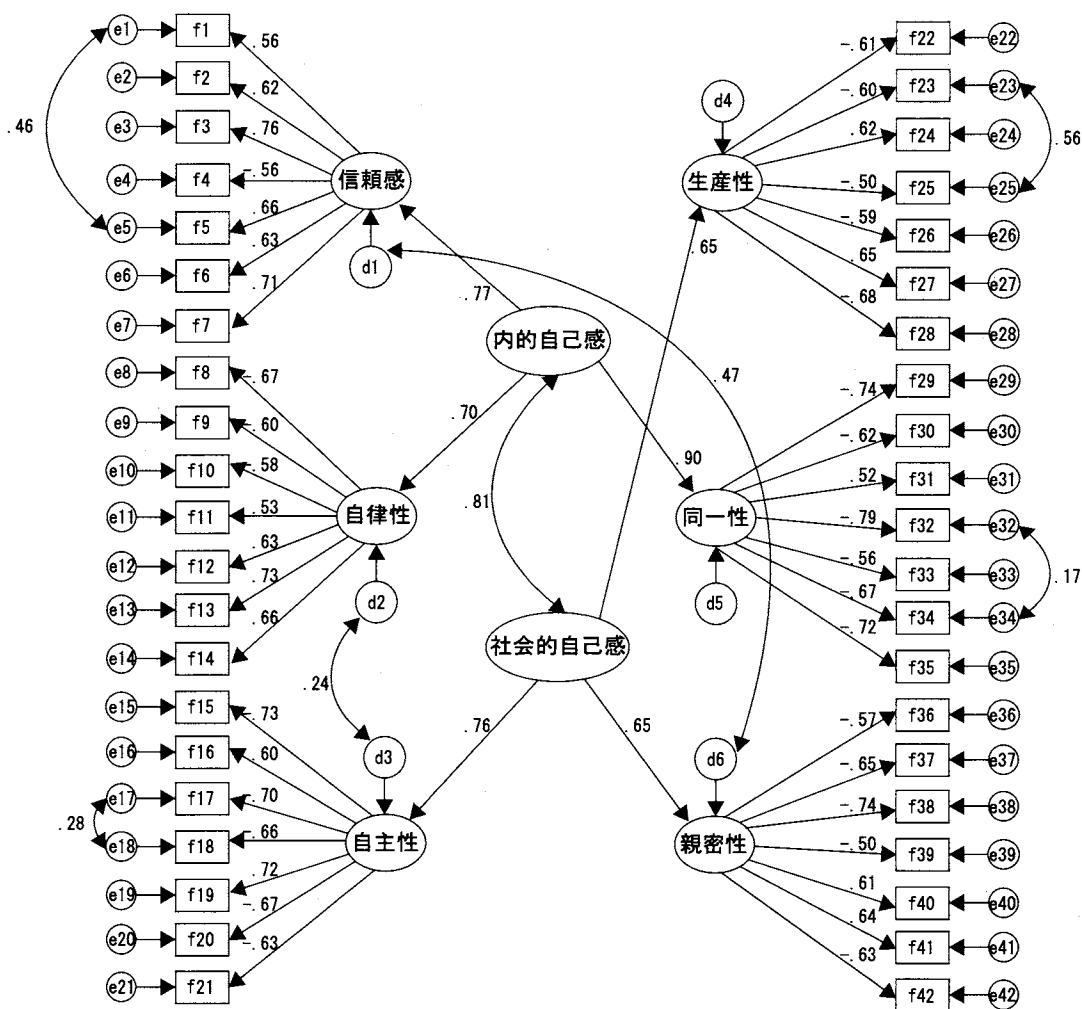


図1 EPCSの階層的構造

2. 確証的因子分析による EPCS の階層的構造

次に、EPCS の内的構造を SEM (Structural Equation Modeling) により確証した結果が図1である。図中、因子名で信頼感とあるのは基本的信頼感を図のレイアウトの都合上略記したものである。また、観測変数名は、ソフト (AMOS) の制約上、表1の各項目番号の前に f を付けたものである。

図1によるモデルの適合度は $GFI = 0.810$, $RMSEA = 0.058$ であった。GFI は 0.9 以上、RMSEA は 0.05 以下であれば適合度がよいとされる。しかし、GFI は観測変数が 8 以下の場合

0.9 以上であっても必ずしもモデルの説明力があると判断しないほうがよいとされる反面、観測変数が多くなるとその値を大きくするのは難しくなり、30 以上の場合には GFI が 0.9 以下であってもそれだけでモデルを捨てる必要はないとされる (豊田, 1998, 2007)。

このモデルを採用するもう一つの理由は、6 つの人格的構成要素間の因子構造的関係から導き出される心理学的な知見である。

Erikson の漸成発達図式による個々の心理社会的危機を通じて内在化される人格要素は互いに発達連関的に比較的高い相関性を有し、健康なパー

ソナリティとして表面的には1次元であるが、それぞれ固有の人格的機能をもつものと考えるのが自然である。実際、表1の項目間相関行列の探索的因子分析における因子間相関、また尺度間相関(Table 3)をみても相関係数に多少のばらつきがあり、6尺度間の相関行列の第1固有値の大きさは全分散の約51%で、6尺度間相関行列を2因子により説明する方が妥当と考える。

第1因子は、他者からの信頼や自己や自分の人生への信頼感、社会からの承認をとまなう自信をもった自律の感覚、自己の斉一性、一貫性、自己受容の同一性の感覚を包摂する、内的な経験の感覚を表すことから内面的な状態を意味する「内的自己感」の因子と名づける。第2因子は、社会的な場面や物事に対する自主的、積極的な働きかけの経験を表す自主性・積極性の感覚、物事の達成のための持続的な忍耐を伴う努力の結果得られる達成の喜びの経験を表す生産性の感覚、自己を見失うことなく他者と親密な関係を形成、維持することのできる親密性の感覚を包摂する因子で、環境への働きかけの経験に特徴づけられた「社会的自己感」の因子と名づける。そして、両因子の因子間相関は0.81であり、二次因子水準で1つの高次因子に統合される。

2. 尺度の信頼性

各尺度の信頼性係数(α 係数)を表2に示した。各尺度の α 係数は基本的信頼感尺度が0.838、自律性尺度が0.819、自主性尺度が0.857、生産性尺度が0.819、同一性尺度が0.844、親密性尺度が

表2 EPCS 尺度の信頼性係数

尺 度	基本的 信頼感	自律性	自主性	生産性	同一性	親密性
α 係数	0.838	0.819	0.857	0.819	0.844	0.814

0.814であった。 α 係数は信頼性の下限である(Novick & Lewis, 1967)ことから、各尺度は十分な信頼性を有するものといえる。

3. EPCS の基本統計量

選択された各尺度7項目による被験者(478名)の尺度得点を求めた。尺度得点は各尺度とも健康なパーソナリティの方向に得点が高くなるように項目の採点キィを揃え、各項目0~4点の配点とした。表8は各尺度間の相関行列と平均値および標準偏差である。尺度間相関係数は全て有意($p<0.001$, $df=476$)である。EPCSの6尺度は互いに正の中程度の相関(0.24~0.60)を有しているが、互いに相関しながら、それぞれ一次独立な尺度である(表1)。

研究2 EPCS とビッグ・ファイブ性格特性、生活意識との人格構造的関連性

【目 的】

本研究は、EPCSによって測定される基本的信頼感から親密性と、状況を超えて一貫した行動傾向として現れる性格特性、および価値観に方向づけられた、いわばライフ・スタイルというべき行

表3 EPCS の相関行列と平均値および標準偏差

尺 度	基本的 信頼感	自律性	自主性	生産性	同一性	親密性	平均値	標準偏差
基本的信頼感	1.000	0.422	0.390	0.300	0.604	0.503	13.80	5.06
自 律 性	0.422	1.000	0.449	0.321	0.552	0.237	11.57	4.94
自 主 性	0.390	0.449	1.000	0.387	0.445	0.392	13.18	5.74
生 産 性	0.300	0.321	0.387	1.000	0.315	0.326	16.94	5.25
同 一 性	0.604	0.552	0.445	0.315	1.000	0.421	12.41	5.88
親 密 性	0.503	0.237	0.392	0.326	0.421	1.000	17.64	5.51

動傾向としての生活意識との相互的な関連性を明らかにすることによって、EPCS 各尺度の人格的機能の性質を明らかにすることを目的とする。

性格特性は、和田（1996）による性格特性用語を用いたビッグ・ファイブ測定尺度を用いた。ビッグ・ファイブは、情緒安定性、開放性、誠実性、調和性および外向性と呼ばれる5つの性格特性である。情緒安定性は不安や情緒的な動揺、混乱の生じにくさの傾向を、開放性は独創性や想像力に富んで、好奇心が強く、新しい経験を積極的に取り込んでいこうとする傾向、誠実性は物事にまじめに取り組み、成し遂げようとする傾向で、研究者によっては勤勉性とも呼ばれる特性である。調和性は温和で、寛大で、良心的、協力的な傾向で、協調性とも呼ばれる特性である。そして外向性は心的なエネルギーが外に向かい、話し好き、陽気、社交的、活動的、積極的な傾向を表す。

また、生活意識は藤村（2003）が構成した尺度を用いる。これらは、① 家族への情愛性；家族への愛情に動機づけられた家族や家庭を大切にするという生活意識、② 向社会性；見返りを求めない利他的な生活意識、③ 日本の宗教性；神仏への信仰と先祖供養、子孫の繁栄や永続といった現世利益的な日本的な宗教観に基づく生活意識、④ 自己中心性；規範や周囲の期待にとらわれないうで、自己の気分や欲求に従おうとする生活意識、⑤ 知的生活志向性；知的向上心が強く、自己を高めるための努力を惜しまない生活意識、⑥ 虚飾性；金銭欲、物質欲と見栄や体裁を重んじる生活意識の6尺度である。

【方 法】

1. 調 査

調査はEPCSを構成するための調査の際、和田のビッグ・ファイブ測定尺度の用紙、藤村の生活意識調査用紙を同時に配布して行なった。したがって、調査時期、被験者は研究1と同じであ

る。

尺度得点は、性格特性、生活意識ともに尺度名の方向が高得点になるように項目の採点キィを描えた。

2. 分 析

本研究の目的は、EPCSが測定する基本的信頼感から親密性の自我感がどのような人格的機能を有するのか、性格特性、生活意識の各次元との人格構造的な関連性から明らかにすることであることから、EPCS6尺度、性格特性5尺度、生活意識6尺度の17尺度間の相関行列を求め、探索的因子分析を行なう。探索的因子分析は、17尺度間の相関行列の固有値のスクリーングラフから因子数を4とし、主因子法の繰返しにより共通性を推定し、共通性が最終的に収束したときの主因子解を、Varimax法で単純構造を求め、さらにPromax法で斜交因子解を求めた。

【結 果】

17尺度間の相関行列は表4、因子分析結果のPromax解は表5に示した。

EPCSの各尺度とビッグ・ファイブ性格特性および生活意識の各尺度との相関係数を概観し、相対的に高い相関を有するものを取り上げる。基本的信頼感は性格特性の情緒安定性と0.51、外向性と0.48、開放性と0.44の相関を有するほか調和性とも0.30の相関を持つが生活意識の各尺度とはあまり高い相関を持たない。自律性は性格特性の情緒安定性と0.58、開放性と0.44、生活意識の自己中心性と0.44、虚飾性と-0.38の相関を有している。自主性は性格特性の開放性と0.50、外向性と0.67、生活意識の自己中心性と0.48の相関を有する他、情緒安定性と0.38の相関を有している。生産性は性格特性の誠実性と0.57、生活意識の知的生活志向性と0.63の相関を持つほか、向社会性と0.37の相関を持つ。同一性は

表5 EPCS, 性格特性, 生活意識の因子構造的関係

		EPCS					性格特性					生活意識						
	基本的信頼感	自律性	自主性	生産性	同一性	親密性	情緒安定性	開放性	誠実性	調和性	外向性	家族情愛性	向社会性	日本の宗教性	自己中心性	知的生活志向	虚飾性	
EPCS	基本的信頼感	1.00	0.42	0.39	0.30	0.60	0.50	0.51	0.44	0.22	0.30	0.48	0.19	0.22	0.12	0.29	0.23	-0.25
	自律性	0.42	1.00	0.45	0.32	0.55	0.24	0.58	0.44	0.21	0.13	0.26	0.00	0.01	-0.08	0.44	0.30	-0.38
	自主性	0.39	0.45	1.00	0.39	0.45	0.39	0.38	0.50	0.16	0.07	0.67	0.09	0.23	0.06	0.48	0.33	-0.22
	生産性	0.30	0.32	0.39	1.00	0.32	0.33	0.18	0.23	0.57	0.29	0.30	0.24	0.37	0.12	0.03	0.63	-0.26
	同一性	0.60	0.55	0.45	0.32	1.00	0.42	0.64	0.42	0.23	0.28	0.37	0.03	0.08	-0.03	0.29	0.22	-0.42
性格特性	親密性	0.50	0.24	0.39	0.33	0.42	1.00	0.33	0.19	0.20	0.40	0.56	0.22	0.44	0.15	0.11	0.12	-0.31
	情緒安定性	0.51	0.58	0.38	0.18	0.64	0.33	1.00	0.34	0.12	0.28	0.35	0.04	-0.11	0.31	0.06	0.06	-0.31
	開放性	0.44	0.44	0.50	0.23	0.42	0.19	0.34	1.00	0.08	0.07	0.40	0.01	0.15	0.10	0.48	0.24	-0.11
	誠実性	0.22	0.21	0.16	0.57	0.23	0.20	0.12	0.08	1.00	0.31	0.20	0.19	0.28	0.14	-0.23	0.45	-0.23
	調和性	0.30	0.13	0.07	0.29	0.28	0.40	0.28	0.07	0.31	1.00	0.27	0.32	0.46	0.08	-0.21	0.19	-0.36
生活意識	外向性	0.48	0.26	0.67	0.30	0.37	0.56	0.35	0.40	0.20	0.27	1.00	0.22	0.40	0.15	0.31	0.16	-0.11
	家族への情愛性	0.19	0.00	0.09	0.24	0.03	0.22	0.04	0.01	0.19	0.32	0.22	1.00	0.37	0.37	-0.09	0.23	0.02
	向社会性	0.22	0.01	0.23	0.37	0.08	0.44	-0.04	0.15	0.28	0.46	0.40	0.37	1.00	0.25	-0.13	0.33	-0.17
	日本の宗教性	0.12	-0.08	0.06	0.12	-0.03	0.15	-0.11	0.10	0.14	0.08	0.15	0.37	0.25	1.00	-0.02	0.16	0.24
	自己中心性	0.29	0.44	0.48	0.03	0.29	0.11	0.31	0.48	-0.23	-0.21	0.31	-0.09	-0.13	-0.02	1.00	0.07	0.08
虚飾性	知的生活志向	0.23	0.30	0.33	0.63	0.22	0.12	0.06	0.23	0.45	0.19	0.16	0.23	0.33	0.16	0.07	1.00	-0.23
	虚飾性	-0.25	-0.38	-0.22	-0.26	-0.42	-0.21	-0.31	-0.11	-0.23	-0.36	-0.11	0.02	-0.17	0.24	0.08	-0.23	1.00

	尺度名	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
E P C S	基本的信頼感	0.333	0.379	0.250	-0.041
	自律性	0.431	0.486	-0.296	0.220
	自主性	0.671	0.012	0.166	0.156
	生産性	0.110	0.080	0.159	0.684
	同一性	0.281	0.675	-0.069	0.011
性 格 特 性	親密性	0.135	0.265	0.572	-0.151
	情緒安定性	0.272	0.687	-0.122	-0.146
	開放性	0.619	0.034	0.029	0.095
	誠実性	-0.161	0.194	0.144	0.536
	調和性	-0.349	0.485	0.448	0.010
生 活 意 識	外向性	0.484	-0.006	0.569	-0.098
	家族への情愛性	-0.052	-0.145	0.534	0.111
	向社会性	-0.082	-0.082	0.694	0.176
	日本的宗教性	0.121	-0.407	0.486	0.090
	自己中心性	0.891	-0.166	-0.171	-0.086
因 子 間 相 関	知的生活志向性	0.166	-0.076	0.036	0.786
	虚飾性	0.191	-0.700	0.160	-0.169
		1.000	0.433	0.215	0.113
		0.433	1.000	0.420	0.286
		0.215	0.420	1.000	0.331
		0.113	0.286	0.331	1.000

性格特性の情緒安定性と 0.64、開放性と 0.42、生活意識の虚飾性と -0.42 の相関を持つ。そして親密性は性格特性の外向性と 0.56、調和性と 0.40、そして生活意識の向社会性と 0.44 の相関を持つ。

EPCS の各尺度が EPSC 間の相関係数よりも性格特性、生活意識の尺度とより高い相関係数を持つものもあり、EPSC、性格特性、生活意識間の相互的な関連性を見るには、これら全ての尺度間相関行列を探索的因子分析を行う必要がある。表 5 はその因子分析結果の因子パターン行列である。

第1因子は、EPCSの基本的信頼感(0.333)、自律性(0.431)、自主性(0.671)、性格特性の開放性(0.619)、調和性(-0.349)、外向性(0.484)、そして生活意識の自己中心性(0.891)に共通に機能する非調和的外向性因子と呼んでおく。本因子は、自己や世界に対する信頼感を持ち、自分で物事を決め、決めたことへの判断のゆるぎなさの自律性、自主的・積極的な自我感と好奇心に満ちているんな経験を自己に取り込み、自己を高めるように外界に働きかけるが、それが慣習や他者か

らの期待にとらわれずに実現しようとする人格像を表すものである。本因子における EPCS の自律性、自主性はまさにこのような動きを共有する自己感である。本因子における自律性は非調和的で、自我の外界との適応的な調整機能を伴わない方向に機能するものといえる。次の第 2 因子によって説明される自律性機能との対比で、この因子における自律性機能を「非調和的自律性」機能と呼ぶことにする。

第 2 因子は、EPCS の基本的信頼感 (0.379)、自律性 (0.486)、自我同一性 (0.675)、性格特性の情緒安定性 (0.687)、調和性 (0.485)、生活意識の虚飾性 (-0.700)、日本の宗教性 (-0.407) に共通に機能する因子である。本因子は、基本的信頼感を有し、自分の判断で物事を決め、自分で決めたことへの判断や行動のゆるぎなさ、齊一的で一貫した自己の確かさの感覚、情緒安定的で温和で寛大で調和的・協調的な性格特性、そして物や金にとらわれず見栄や体裁を張らないといった人格像を表す。本因子は健康な人格の方向にプラスになるよう抽出されているが、逆の方向から解釈するとさらに解りやすい。基本的不信感、恥・疑惑、同一性拡散、情緒不安定、非調和性・非協調性、虚飾性が同じ人格的基盤を共有することを表し、情緒不安を伴う自我の脆弱さが社会的には非調和性・非協調性といった性格特性となって現れ、そして物や金といった物質的な対象へのこだわりと世間体を気にして見栄をはったり、体裁をつくろい、また現世利益を求める生活意識となって現れるという人格像である。また、本因子における自律性は、自己や自己が存在する世界への信頼感、同一性および情緒安定と同じ人格的基盤をもつ場合、調和的・協調的に機能することを表すものといえる。第 1 因子における自律性機能とは対照的に、本因子における自律性は「調和的自律性」とでも呼ぶべき人格機能的性質をもつものと考えられる。また、本因子は、第 1 因子とは 0.433 の因子間相関を持つ。

第 3 因子は、EPCS の親密性 (0.572)、性格特性の調和性 (0.448)、外向性 (0.572)、生活意識の家族への情愛性 (0.534)、向社会性 (0.694)、日本の宗教性 (0.486) から成る因子である。本因子には弱いながらも自律性が -0.296、基本的信頼感が 0.250 で関与する。自己を見失わないで他者との親密な関係を築き維持することができる、他者と調和的・協調的な関係、対人的に積極的、社交的、そして家族や他者に対する利他的な行動傾向といった人格像を表す因子である。

第 4 因子は、EPCS の生産性 (0.684)、性格特性の誠実性 (0.536)、生活意識の知的生活志向性 (0.786) から成る広義の勤勉性を表わす因子である。生産性は勉強や仕事などの課題に取り組む持続的な忍耐と達成したときの喜びの経験に関する自己感であり、誠実性は勤勉で計画的に物事に取り組む性格特性で、知的生活志向性は自己をより高めることに価値をおき、努力を傾注するという人格的特徴を表す。

【総合的考察】

本研究において構成された EPCS の 6 尺度は、係数が 0.814~0.857 で、Enright, Lapsley and Lallensack (1983) によって報告された Rasmussen (1964) の尺度の信頼性 (α 係数 0.46~0.57) やその日本語版 (宮下, 1987, α 係数 0.55~0.75)、Rosenthal, Gurney and Moore (1981) の尺度の信頼性 (α 係数 0.57~0.75) に比して十分な信頼性を得ているものといえる。Rasmussen や Rosenthal らの尺度やその日本語版尺度の信頼性は項目数に比して低いといわざるを得ないし、 α 係数は尺度の 1 次元性を保証するものではない (Green, Lissitz and Mulaik, 1977) ことから、これらの尺度の α 係数の低さは各尺度が必ずしも 1 次元的でないことを物語っている。このことは、得られた尺度得点が多義的にならざるを得ない。また、尺度が 1 次元であるためには尺度項目群

が1つの共通因子で満たされていることが必要である (McDonald, 1981)。このような意味から EPCS の各尺度は2つの条件、すなわち尺度が1次元的で、尺度得点が一義的に構成概念をあらわすという条件を満たしているものといえる。

Erikson のパーソナリティ構成要素は発達連関的に互いに高い相関性が想定され、実際に Rasmussen や Rosenthal らの尺度において高い相関性が報告されている (Rasmussen, 1964 ; Rosenthal, et al., 1981)。このような高い相関性を有する心理学的構成概念を尺度化する場合、次のような困難な問題が生じる。因子の妥当性に基づいた尺度構成を行う場合、通常、概念ごとに作成された全項目間の相関行列を因子分析して、当該因子に高い負荷を持ち、他の因子にはあまり負荷しない項目を尺度項目として選択する。高い相関性のある心理学的構成概念を測定すべく用意された全項目間相関行列を因子分析すると、最初の数因子に概念を超えて項目が集中するため意図する尺度水準より高次の人格因子となり、最後の方の因子にはほとんど負荷する項目がなくなってしまう。また、このような状況下で因子分析的に尺度構成を行おうとすると、項目作成段階において同一尺度内の項目間相関が極端に高い項目を用意しなければならず、質問紙法においては同義語反復的な項目になってしまうという問題である。

EPCS の構成においては、グループ主軸法を尺度構成の前処理的に適用することによって、Rasmussen や Rosenthal ら、そしてその日本語版の尺度が持つ問題点を克服することができた。

表1、表2および図1から明らかのように、EPCS の各尺度は一次元的に構成されたものといえる。図1は、基本的信頼感から親密性がそれぞれの尺度項目の変動要因であり、パーソナリティ構成要素は高い相関を有しながらそれぞれ1次独立的に機能する「内的自己感」および「社会的自己感」と名づけられた構成概念の内実の影響を受けるというパス図を検証するものである。Borsboom,

Mellenbergh and Heerden (2004) は、測定の妥当性について、目的とする属性が存在し、その属性における個人差が測定結果の個人差を生ぜしめているとき妥当性があるとする見解を述べている。図1はこのような意味で、EPCS の各尺度の項目得点がそれぞれの尺度名で表される構成概念で表される属性における個人差を反映することを表すものといえる。

Erikson (1959, 1963) の漸成発達図式は「健康なパーソナリティ」と「その傷つき」といった高次の1次元性を表したものであるが、それぞれの心理社会的危機を通じて内在化された個々の人格要素はそれぞれの人格的機能を有しながら人格的に統合されているものといえる。図1は、EPCS の6尺度はそれぞれ1次元的に構成され固有の人格的意味を持ち、「内的自己感」、「社会的自己感」の2因子構造的で、高次には1次元的に人格的に統合される姿を示すものである。

EPCS の6尺度は、性格特性と生活意識とのジョイント因子分析結果(表5)から以下のような人格機能的性質を持つことが明らかになった。

基本的信頼感は、自分で物事を決め実行し、決めたことへの判断のゆるぎなさの自律性、自主的・積極的な自我感と一緒に、好奇心に満ちていろんな経験を自己に取り込み、自己を高めるように外界に働きかけるが、それが慣習や他者からの期待にとらわれずに実現しようとする人格像を形成する場合と、自分の判断で物事を決めて実行し、自分で決めたことへの判断のゆるぎなさ、斉一的で一貫した自己の確かさの感覚、情緒安定的で温和で寛大で調和的・協調的で、物や金にとらわれず見栄や体裁を張らないといった、対人的に穏やかで調和的な人格像を形成する場合がある。このように基本的信頼感は他の人格的諸変数と結びついて因子構造的には第1因子、第2因子が表すような人格的機能の両面を有するものといえる。

自律性は、環境への主体的・積極的な行動と結びつくとき、すなわち自主的、積極的、開放的、

外向的な人格次元の特徴を有するとき、非調和的・非強調的な方向に機能する。また、自律性が基本的信頼感、自我同一性、情緒安定性を共有する人格の基盤を有して形成されるとき、調和的・協調的な方向に機能することが表5の第1因子、第2因子の因子構造的関係から明らかになった。

ところで、鑑(1977)は、Eriksonのいう自律性を「究極的には、われわれは自分自身であり、個人である」との欧米的な文化における自我の概念が前提となり、個人の自我が実現する方向に向けられる「能動的自律性」と呼んだ。他方、日本的な自我の自律性は外界に対して自分がいかに適応するかについての能力を形成し、養うという形をとり、これを「受動的自律性」と呼んだ。

本研究における「非調和的自律性」は、鑑のいう「能動的自律性」にほぼ対応するものといえるが、「調和的自律性」が鑑の「受動的自律性」とどのような重なりを持つかは、今後のEPCSの多角的な研究を待たなければならない。少なくとも、本研究において用いた人格諸変数との因子構造的関係からは、自律性が内在化される過程において個人の情緒的気質の関わり方の違い、すなわち、自律性の心理社会的危機を通じた経験の内在化が情緒的体験を強く伴ったものかどうかが自律性を「調和的自律性」あるいは「非調和的自律性」に方向づけるのではないかと考えられる。言い換えれば、個人の自律性が調和的に機能する人格要素であるのか、非調和的に機能する人格要素であるかは、情緒的体験の関与の程度に関係するものといえる。

このような自律性機能の違いは、欧米的文化と日本的文化の違いに帰属するというよりも、心理社会的危機における経験の内在化過程において、文化を含んだ他の人格的諸変数との相互関係により、個人の人格的内実が異なることによると理解すべきものと考えられる。

自主性は社会的な場面や物事に自主的、積極的に行動する自我感であり、自己や自己が存在する

世界への信頼感、そして自律的になされた自らの判断や行動のゆるぎなさの自我感と共にあり、いろいろな経験を自己に積極的に取り込み、自己の実現に向かって慣習や周囲の期待とは独立に取り組むといった行動的な性質と人格的基盤を同一にする。

生産性は、先に勉強や仕事、課題に取り組む持続的な忍耐と達成の喜びの自我感と定義されたが、性格特性的には物事に誠実に、真面目に取り組むという勤勉的な性質、知的向上心が強く、自分を高める努力を惜しまない生活意識と結合し、困難なことがらも持続的な努力を惜しまないで成し遂げようとする勤勉的・向上的な性質を有するものといえる。

同一性は、EPCSの基本的信頼感、自律性、性格特性の情緒安定性、調和性、生活意識の日本的宗教性、虚飾性と共通の人格的基盤を共有する。虚飾性は内実の空虚さが物質への執着や見栄を助長するといった生活意識を表す(藤村, 2003)ことから、自律的であることや、他者との協調、人格的内実の豊かさはしっかりした自己の確立が伴うことにより成しうるものといえる。また、自我の同一性は自己や自己が存在する世界に対する信頼感を伴い、同一性の確立された状態は情緒的安定的な特性を伴うことが明らかである。

親密性は、先に自己を見失うことなく他者との親密な関係性を形成し、それを維持する自我感として定義されたが、他者と調和的・協調的、人との接触を好み、話好きで社交的な性格特性、家族への愛情、他者への利他的性、子孫繁栄といった日本的宗教観と結合し、対他的な性質をもつ。

EPCSは基本的信頼感から親密性のパーソナリティ構成要素を個々に測定し、個人の自我状態のプロフィール化し、診断が可能になるものといえる。

【引用文献】

- Borsboon, D., Mellenbergh, G. J., and Van Heerden, J. (2004). The concept of validity. *Psychological Review*, 111, 1061-1071.
- Enright, R. D., Lapsley, D. K., Cullen, J., and Lallensack, M. (1983). A psychometric examination of Rasmussen's Ego Identity Scale. *International Journal of Behavioral Development*, 6, 89-103.
- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the Life Cycle*. International University Press. (小此木啓吾編訳 1973 自我同一性 誠信書房)。
- Erikson, E. H. (1963). *Childhood and Society*. (2nd Ed.). W. W. Norton & Company. (仁科弥生訳 1977, 1980 幼児期と社会 I・II みすず書房)。
- 藤村和久 (2003). 家庭における生活意識の構造 - 測定尺度の構成 - 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 2, 129-138。
- 藤村和久 (2004). グループ主軸法による相関性の高い行動特性の測定尺度の構成 - Erikson のパーソナリティ構成要素の尺度の構成 - 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要, 107-117。
- Green, S. B., Lissitz, R. W., and Mulaik, S. A. (1977). Limitation of coefficient alpha as an index of test unidimensionality. *Educational and Psychological Measurement*, 37, 827-838.
- McDonald, R. P. (1981). The dimensionality of test and items. *British Journal of Mathematical and Statistical Psychology*, 34, 100-117.
- Novick, M. R., and Lewis, C. (1967). Coefficient alpha and the reliability of composite measurements. *Psychometrika*, 32, 1-13.
- Rasmussen, J. E. (1964). Relationship of Ego Identity to Psychological Effectiveness. *Psychological Reports*, 15, 815-826.
- Rosenthal D. A., Gurney R. M., and Moore, S. M. (1981). From Trust to Intimacy: A New Inventory For Examining Erikson's Stage of Psychological Development. *Journal of Youth and Adolescence*, 10, 526-537.
- 芝 祐順 (1972). 項目分析 肥田野 直編 心理学研究法 7 テスト I 東京大学出版会 53-92。
- 芝 祐順 (1975). 行動科学における相関分析法 (第 2 版) 東京大学出版会。
- 鑓幹八郎 (1977). 自我同一性の根としての自律性に関する一考察 - 能動的自律性と受動的自律性について - 広島大学教育学部紀要, 26, 317-325。
- 豊田秀樹 (1998). 共分散構造分析 [入門編] - 構造方程式モデリング - 朝倉書店。
- 豊田秀樹編 (2007). 共分散構造分析 [Amos 編] - 構造方程式モデリング - 東京図書
- 和田さゆり (1996). 性格特性用語を用いた Big Five 尺度の作成 心理学研究, 67, 61-67。

Construction of Erikson's Personality Component Scale (EPCS)

— From Basic Trust to Intimacy in the Human Life Cycle —

Osaka Shoin Women's University
Kazuhisa FUJIMURA

ABSTRACT

The purpose of this study is to construct scales of Erikson's personality components accordingly characterized by a sense of ego that has been internalized through the first six psychosocial crises that range from basic trust to intimacy in the human life cycle.

Fujimura (2004) selected eight items of each six scale based on the six group principal axes loading of all items prepared.

In this study, all items selected by group principal axis method (Fujimura, 2004) are assessed on factorial validity by applying a factor analysis, and synonymous items in each scale are eliminated or exchanged with other items. Finally, seven items of each scale are determined. The set of scales constructed in this study is named EPCS. The coefficient alpha of each scale is 0.814~0.857.

It is confirmed by structural equation modeling that the path diagram show the internal structure between the EPCS is adequate.

Furthermore, it is examined what personality functional nature of the EPCS has on factor structural relations by applying a factor analysis to the correlation matrix showing a correlation coefficient between EPCS, the big five scales of personality trait and the lifestyle scales in each element.

Keywords: Erikson, sense of ego, ego identity, construction of psychological scale, structural equation modeling